

古本屋で見つけた一冊の本

谷口 正大

やっと90歳に達する時が来ました。18歳で教会と出会い20歳で洗礼を受けました。2年間の勉強は私にとって伏魔殿に迷い込んだようになかなか理解が出来ないでいました。

神、キリスト、教会、洗礼、信者、靈魂等理解するのに神父さんや伝道師さんに訳の判らぬ質問をして過ごしていました。別に相手を困らせようとしている分けではありませんが、私は納得がいかないままているのが我慢できないでいました。ある神父様に“あなたは悪魔の友達です”。と言われ、今にして思えば私は神の存在の証明が欲しかった。

そんな時京都の古本屋歩きをしていて古ぼけた1冊の本が目についた「真理之本源」さてこの本は明治30年(1897)に初版本が出されたもので、著言には

「此の書は佛人宣教師ドルソール氏が、長年月間布教せられたる際に、各地において園述せられたるものを、筆者が私かに筆記し置きたる中より撰擇して順を序で分ちて、一書に編したるものなり、読む人々に依りて天主教の要旨を識るを得ば筆者の望みは足る。」

明治三十年一月五日 林寿太郎識

と記されております。

私がこの書を読むにあたって一番知りたかった事 “神とは何ぞや” “靈魂とは何ぞや”

明治維新後我が国がキリスト教禁教を改め信教の自由が認められ、いち早く日本の布教を始めたフランス外国宣教会の司祭たちが、多神教の日本人に対して一神教の天主教(カトリック)を布教するには、自然界のあらゆる物の存在やその運動の道理等を造物主(創造主)の全智全能全善の働きを、物理や化学の実例を解きながら話されている講話は、私のようなものにもそれまであまり気付かずいたすべての物の存在やその不滅などに気づかされ、そこには人間ではなしえない創造の力が働いていることに神の存在を意識することが出来たように思います。

明治初期の文体ですので言葉が理解できない処もありますが、味わい深い教理の本でした。

